様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３９７

研究課題名（和文）清印本を中心とした『水滸伝』の研究

研究課題名（英文）The Shuihu Zhuan, especially on the texts printed in the Qing dynasty

研究代表者
氏岡　真士（UJIOKA, MASASI）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：６０３０３４８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：七十回本『水滸伝』は、金聖嘆(1607?～1661)が物語の後半を削除し本文に批評を付したもので、好評を博したものの市場独占には至らなかった。競争相手の簡本はしばしば陳枚(1638～1707)こと陳簡侯の序を冠するが、彼は当時の有名な編集者であり批評家でもあった。
一方、七十回本は王望如によって増補された。彼は1652年の進士であり、自分の批評や陳洪綬(1598~1652)の繡像40枚を増補したのである。雍正年間(1723～1735)には、勾曲外史の序を付す七十回本が出版された。繡像は新しくなり王の批評は無い。その後は多様化が進み、出版競争は清末に石版印刷など新技術が中国に導入されるまで続いた。

研究成果の概要（英文）：70-chapter edition of the Shuihu-zhuan was edited by Jin Shengtan(1607?~1661), who cut out the latter part of the story and made comments on the text. It had a reputation with many readers, but could not monopolize the market. Simplified editions were its rivals, some of them begin with the foreword written by Chen Mei(1638~1707), or Chen Jianhou, who was a well-known editor and critic at that time.
Meanwhile, 70-chapter edition was enlarged by Wang Wangru, who passed the imperial examination in 1652. Wang supplemented the original with his comments and 40 figures of heroes drawn by Chen Hongshou(1598~1652). In the years of Yongzheng(1723~1735), a new version of the 70-chapter edition was published, the foreword of which was written by Gouqu Waishi. This version changed the figures and had no Wang's comments. After that, the diversification was accelerated. The publishing battle continued until the Late Qing when new methods of printing such as lithography were introduced into China.

研究分野：中国文学

キーワード：水滸伝　清印本　七十回本　簡本　金聖嘆　陳枚　陳簡侯　王望如

１．研究開始当初の背景

『水滸伝』の研究は従来、明刊本を中心として行なわれてきた。それは、できるだけ成立にさかのぼって考えようという姿勢に基づいている。ただし『水滸伝』は、つづく清代の中国においても、さらには当時の日本や西洋などでも、享受され続けていたのである。

清代の『水滸伝』に対する研究が少ない理由のひとつは、以下の印象によるものであろう。すなわち明末の 1641 年（崇禎 14 年）の序をもつ金聖嘆の七十回本（貫華堂本）が登場するや一世を風靡し、他のバージョンは駆逐されてしまったという印象である。七十回本の最大の特徴は、従来のテキストの前半のみで話を完結させたことであった。

1920 年代に胡適が『水滸伝』研究に着手した当初、七十回本以外のテキストはほとんど入手できなかったことも、清代の『水滸伝』は七十回本の独擅場という印象を強めたことであろう。

２．研究の目的

しかし清代における『水滸伝』の出版状況は、けして上述の印象ほどに単純ではない。

じっさい近年ようやく研究が進んだ百二十四回本や百十五回十巻本、同八巻本、あるいは従来軽視されてきた『漢宋奇書』本や『征四寇』本などは、いずれも清代になってから登場している。

七十回本にしても、貫華堂本のみが爾後 20 世紀まで版を重ねつづけたはずもない。多様なテキストが各地に所蔵されており、遠く西洋に伝わったものも複数ある。

そこで清代に印刷されたテキスト、すなわち清印本を中心として、様々な『水滸伝』の実態と背景を研究することが目的となった。

３．研究の方法

『水滸伝』を七十回本とそれ以外の諸本に二大別のうえで研究を進めた。なお『水滸伝』の続書も清代に複数登場しているが、これについては別に研究を計画している。

前者の七十回本は、孫楷第や劉復・馬蹄疾といった先達によって、王望如本や勾曲外史序本などいくつかのテキスト群の存在が指摘されてきた。また日本や西洋の目録等によっても、七十回本と思しき正体不明の『水滸伝』の存在が認められた。そこでこれらについて可能な限り調査分析を行ない、相互関係を明らかにしてゆく方法を採った。

また後者、すなわち七十回本以外の諸本については、明刊本と同様、繁本と簡本に分けられるが、しばしば陳枚なる人物の序を冠する簡本に重点をおいた。そして繁本も含め、必要に応じて明刊本にさかのぼりながら、できる限り調査分析を進め、相互関係を整理してゆく方法を採った。いっぽう陳枚の素性についても、これを明らかにすべく努めた。

４．研究成果

七十回本については、貫華堂本から王望如本や勾曲外史本をへて、胡適も関与した新式標点本にいたる系譜を、日中欧 3 地域の資料に目配りしつつ跡付けることができた。

七十回本の特徴は前述のほかに、金聖嘆の批評を随所に加えた点などがある。ところが金聖嘆存命中の 1657 年（順治 14 年）、つまり清初には早くも、王望如の批評と陳洪綬の挿絵を増補したテキストが登場している。

この王望如本は貫華堂本と同じく全 75 巻から成るが、やがて全 20 巻（および「巻首」）の重刻本も登場する。現存する王望如本のほとんどは後者だが、誤脱も見られ質は劣る。さらにその後修本や三刻本もおよそ 19 世紀に出現し、前者は日本、後者は残本がスペインに現存する。しかも後者は「貫華堂」本を僭称している。なお「貫華堂」の僭称といえば、後述の勾曲外史序本のうち初期の光霽堂本を利用したものも、日本に所蔵される。

本物の貫華堂本も版を重ね、パリに伝わる 2 本などはかなり摩耗しているが、諸本の封面を見ただけでも、版木の所有者を変えて度々増刷されたことが窺える。なお北京には、貫華堂本の体裁を模しつつ版式を微妙に改め、かつ「貫華堂」本とは称さないテキストもあり、やはり清初の刻本と目される。

勾曲外史序本は 1734 年（雍正 12 年）の序を冠するが、王望如の批評は無く、挿絵も陳洪綬のそれを参照しつつ描き改めている。この系統は、やがて芥子園本に代表されるように小型化し、さらには精粗双方の諸本を生むことになる。日本の柏悦堂も 1883 年（明治 16 年）に翻刻しており、これは精刻と言ってよいが、ただし銅版本である。

中国でも 19 世紀後半には石印や鉛印の技術が普及し、ようやく七十回本の天下となったことは、つとに厳敦易が指摘している。ただそこでは、王望如本と勾曲外史序本 2 系統の出版競争があった点は軽視できない。

この状況を一変させたのが、胡適も関与した新式標点本（1920 年、民国 9 年）である。各種の句読点を用いて本文を読みやすくした活字本だが、一方で王望如はおろか金聖嘆の批評も、また挿絵も、すべて削っている。七十回本の変遷にも文学革命の影響が及び、清印本の時代が名実ともに終わったと言っても良いであろう。

さて七十回本以外の諸本については、とくに鄭喬林本・挿増本・容与堂本について得る所が多かった。また清代の簡本にしばしば序を載せる陳枚の素性も明らかにできた。

陳枚には同名異人も多いが、『水滸伝』の序を書いたのは生卒年が 1638-1707 と考えられる杭州の人である。その父は園芸書『花鏡』を書いた陳淏であり、李漁に協力して編集者・批評家として、無位無官ながら杭州の名

士になった。息子の陳枚も受験には失敗を重ねたが、やはり編集者・批評家として活躍し、『写心』・『留青』の諸集はとくに名高い。それは 17 世紀における浙江を中心とした文人墨客のネットワークを示す資料でもある。

鄭喬林本はドイツに存し、李漁の序を冠するが、百十五回簡本のうち嵌図本としては唯一、あまり研究が進んでいなかった。嵌図本は二大別される。すなわち馬幼垣氏が、各嵌図本の版式から計算した半葉あたりの字数とミュンヘン残本の挿図の標題とを根拠に、鄭喬林本・ミュンヘン残本のグループと劉興我本・藜光堂本・親賢堂本のグループとに分けたのである。この二大別は、検討範囲をテキスト全体に広げても首肯できた。しかし後者がいずれも施耐庵の作を標榜する点は、鄭喬林本が作者を羅貫中と称するのと異なる（ミュンヘン残本の該当部分は散逸）。

作者を羅貫中と称するのは、嵌図本以外の百十五回簡本（十巻本系統）の特徴であり、それらは南京で出版された。ところが嵌図本は上図下文形式を採るから、福建で出版されたはずである。さらに本文を検討すると、鄭喬林本は十巻本系統に接近する場合がある。また鄭喬林本にはミュンヘン残本を簡略化した個所もある。つまり十巻本系統のテキストを参照しつつ再編集を行なった点に、鄭喬林本の特徴があると言えよう。

簡本を遡れば挿増本に端を発するが、これは甲乙両本に分かれる。どちらもヨーロッパの各地に散在し部分的にしか現存しない。艾俊川氏は挿増甲本の残葉 23 枚を 2007 年に新たに発見した。これら残葉の正しい順序を厳密に復元し、またその特徴を分析できた。

挿増甲本は第九回が無い点では十巻本系統より後出の要素をもつが、新発見の残葉で林冲の詠んだ詩が五言律詩となっている点では古い要素を留めており、後者は余呈や葉孔目の描写とともに簡本の系統を判断する指標としても貴重である。また挿図の標題に関しても、従来からの研究結果を補強することができた。つまり上図下文形式と一口に言っても、挿増本と嵌図本や評林本との間に明確な関連は見いだせないが、挿増甲乙両本の間では一定の相関性を持つのである。

容与堂本は繁本であり、『水滸伝』の代表的なテキストともされる。ところが、ほぼ完全な形で現存する北図本・天理本・内閣本の 3 種について、従来は評価が分かれていた。その背景には、版面の特徴と本文の異同ではどちらを重視するか意見の相違があった。

そこでまず版面の特徴を詳細に分析してゆくと、原刻本に対して北図本は後修本、内閣本は再修本とも言うべき同版の関係にあるが、天理本は覆刻本であり版木を異にしていることが分かった。このことは本文の異同の詳細な分析からも裏付けられる。そして原刻本の難読個所に対しては、北図本と天理本が異なる形で修正を試みているものの不十分であり、内閣本が最も読みやすくなっていることも分かった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　９　件）

①氏岡真士、七十回本《水滸》的“原刻本”和“坊本”、信州大学人文科学論集、第 3 号（通巻 50 号）、135-152, 2016、査読有

②氏岡真士、容与堂本『水滸伝』3 種について、中国古典小説研究、第 19 号、1 -20、2016、査読有

③閻小妹・氏岡真士、『杜騙新書』と南方熊楠、信州大学人文社会科学研究、第 10 号、108-127、2016、査読有

④氏岡真士、艾氏珍蔵挿増甲本《水滸》残本新探、明清小説研究、2015 年第 3 期、53-67、2015、査読有

⑤閻小妹、唐代伝奇「離魂記」の虚と実、信州大学人文社会科学研究、第 9 号、29-40、2015、査読有

⑥氏岡真士、《水滸》与陳枚、信州大学人文科学論集、第２号（通巻49号）、145-163、2015、査読有

⑦氏岡真士、鄭喬林本《水滸》的特徴、高田時雄教授退休紀念東方学研究論集［中文分冊］、237-246、2014、査読無

⑧氏岡真士、談插增本《水滸》的插圖標題、信州大学人文科学論集、第１号（通巻48号）、155-183、2014、査読有

⑨氏岡真士、『杜騙新書』と『金瓶梅』、饕餮、第21号、50-69、2013、査読有

〔図書〕（計　１　件）

①氏岡真士、清印本を中心とした『水滸伝』の研究、研究成果報告書別冊、120P

６．研究組織
(1)研究代表者
氏岡　真士（UJIOKA MASASI）
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号：60303484

(2)研究分担者
閻　小妹（EN SYOUMAI）
信州大学・学術研究院総合人間科学系・教授
研究者番号：70213585

(3)連携研究者

(4)研究協力者